

## 「カメラ少年」

(2012)

アメリカの写真用品老舗「コダック社」が倒産した。僕らカメラ少年にとつては憧れの黄色いパッケージのフィルムであった。

小学生の頃から父譲りの古いヤシカのカメラで遊んでいた。夜空にレンズを向け、シャッター開放で円軌道の星の軌跡を撮るのに成功し、独り悦に入っていた。

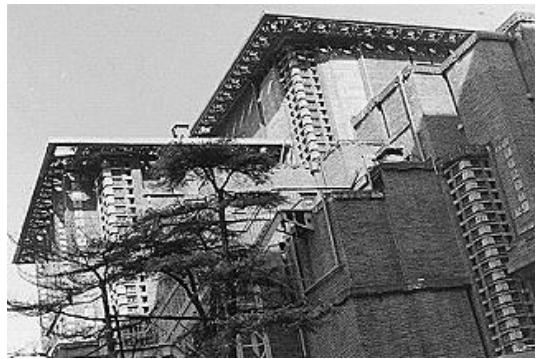
66年入社早々の年、消え去ろうとしている日比谷のF・L・ライトの「帝国ホテル」の記録を撮ろうとの思いが募り、「出張伺」を出したところ、多分上司の機転だつたろうと思うが出張承認が下りた、今から思えば何という若氣の無知・無謀。2台のカメラ（モノクロ、カラー）をぶら提げ、二泊三日でホテルの内外を隈なく撮りまくった。しかもホテルの事前了解も得ないままに・・・、会社常識・社会常識が無いといえばそれまでのお恥ずかしい話でした。その後、特に熱を入れたのは7

2・73年の2回の海外（トルコ）赴任時だ。

プラント建設の建築指導員だったが、週末やバイラム休みを利用しては広大なトルコ国土を飛び回り、又トルコを基地にヨーロッパ各地の歴史建築遺産の写真を撮つて歩いた。フィルムの多くは日本から持ち込み、或いは会社からのカー、ゴ便で送つてもらつたが、そう計算通りにはいかず、どうしても現地で購入する事になり、アグファやコダックのフィルムを買う事が多かつた。



旧帝国ホテル



若き日のコルビュジエの「東方への旅」、辰野金吾の「歐州古典への旅」、

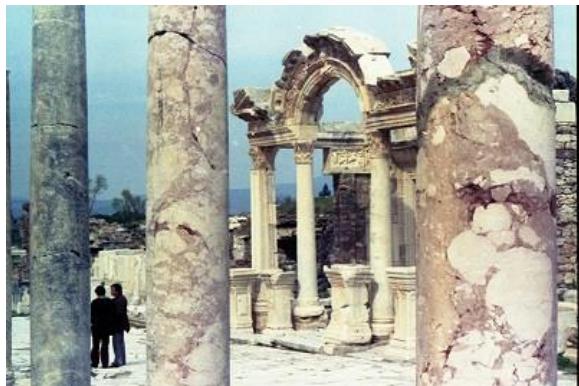
安藤忠雄の「アジア・欧洲への修行」、そして我等が太田静六先生の「ペルセボリス調査」・・・等と比較する積りはないが、同じ道・同じ空気をして同じ啓示を味わう事が出来たのは貴重な体験であった。彼らが残したスケッチブックは驚嘆する程の見事なものだが、現代のセッカチなサラリーマン建築家はカメラが本命で、時々スケッチという忙しい旅だった。帰国時、持っていた愛機ニコンとセイコーの腕時計は置き土産にして帰った。日本製のカメラと腕時計は当時のトルコ人にとっては垂涎の名品だった。

コダック社の倒産に先立つ数ヶ月前、日本ではオリンパス社が破綻の危機に陥った。僕もかつては永らく名機OM-1を愛用した覚えがある、一眼レフのレンズの付け替えが面倒なのが厭で、専らタムロンのズーム

レンズ（20～200mm）を常時装着していたが、お蔵でどんな撮影シーンにも間に合った。少しユトリの有る旅の時にはもう一台のカメラキヤノンに「500mm望遠+テレコンバーター」を装着して、100mm望遠として使用した。本当のプロに言わせれば「ズーム」だ「テレコンバーター」だ・・・等々は素人臭い道具だと馬鹿にされるかもしれないが、忙しいサラリーマン、重い荷物の苦手な僕にとっては精一杯の努力と工夫であった。



トルコ ペルゲ ヘレニズム門



トルコ エフェス ハドリアヌス門

バブルも終り、東京でのひと仕事も終え50代に差掛かろうとする頃、僕のカメラ生活にもボチボチ本格的な機種が欲しいと思い始めていた。

曰くブロニカ6×6判の大判カメラである。狙いを定めていた折も折・・・「デジタルカメラ」なる代物が世に出現した・・・カシオQV・

10である、今から思えば、25万画素・電源は乾電池・・・という玩具の様な品物だったが、画像がすぐに確認出来、何よりも撮った画像がフロッピーに保存出来るという事に、僕は限りない可能性を信じて買つたが、カメラとしてはとてもじゃない使える代物ではなかつた。その2年後、FUJIIが「ファインピックス・700」150万画素のデジカメを販売始めたのですぐに購入した。これで僕のデジカメ生活が本格的に始まる事になり、ひと抱えもある思い出深いフィルムカメラ2台が埃及を被り始める」とになる。その後デジカメは恐ろしいほど急速に進化を始め、僕も何台か使つたが、やはり最後は、高級一眼レフ・・・ではなく、「ズームデジカメ（26~624mm）」に落ち着いた、セッカチカメラマンには必携である。

デジカメの出現により、長年僕を悩ましていたフィルムの保存・整理に新しい道が開けた。少年時代からの古いフィルムも一切捨てずに保管していたのだが、このフィルムの「整理・検証」作業が厄介極まりなかった。ある時はライトボックスとフィルムルーペを駆使し、ある時期には、何本かのフィルムを「棒焼き（ベタ焼き）」にする事も試みたが満足出来なかつた。そのうちカメラ屋さんがネガフィルムのデジタル化（CD）を始めた。試しに何本かを頼んでみたら見事なデジタル化の完成であつた。ところがフィルム1本に付き500円だという・・・千本頼めば・・・？ その内EPSILONのスキャナーにフィルムスキャン機能が

付き始めたのでこれを購入して自分でスキャンし、直接パソコンに取り込んだ。時間はかかるが引退後の身にはなんとか耐えられ、保存ファイルのデジタル化を概ね終えた。これでやっと、過去の全てのファイル写真仕事がパソコンで見返す事が出来るようになり感慨深かった。



ローマ フォロロマーノ



アテネ パルテノン

それより何より、デジカメ写真生活を始めて約15年・・・ファイル写真生活40年にはとても及ばないが、携帯の「デジカメ・ポケット・デジカメ・ズームデジカメの3台を気の向くままに使い廻している為、撮つた写真の枚数はもう半端ではない。

いくらパソコン保存とはいえ、ファイルとは別次元の整理方法が必要になってきた。「カメラ別仕分け」か? 「撮影日時順」、「撮影対象」別仕分け? 果ては「顔認識」、「撮影場所」別か? ・・・いずれにせよ驚くべき事に、デジタル写真には撮影時のあらゆるデータが記録されて

いる、フィルム写真で長い間育つた我らアナログ人間は唯、驚きの日を見張るしかない。